

令和 7 年度 全国学力・学習状況調査

～石狩市における結果の概要～

石狩市教育委員会

令和7年度 全国学力・学習状況調査における石狩市の結果について

I

調査概要

● 目的

- (1) 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

● 実施日

令和7年4月17日（木）

中学校理科のみ CBT 調査（コンピュータを使用した調査）のため、4月14日～17日

● 対象学年・人数

小学校、義務教育学校前期課程の第6学年～10校 429名で実施

中学校、義務教育学校後期課程の第3学年～7校 435名で実施

● 内容

小学校、義務教育学校前期課程・・・国語 算数 理科 児童質問調査

中学校、義務教育学校後期課程・・・国語 数学 理科 生徒質問調査

小・中学校、義務教育学校・・・学校質問調査

※中学校理科は、IRTによる経年比較を行うために問題の一部を非公開とし、公開問題と非公開問題を組み合わせた出題方法を採用

II

本市の結果概要

● 教科の結果

	小学校		中学校	
	全国平均正答率	全国平均と比較	全国平均正答率	全国平均と比較
国語	66.8%	ほぼ同様（下位）	54.3%	やや低い
算数 数学	58.0%	やや低い	48.3%	相当低い
理科	57.1%	同様	503	低い

石狩市における評語（正答率と比較）※中学校理科は500を基準とするIRTスコア

相当高い	7%以上	相当低い	－7%以下
高い	5%以上7%未満	低い	－5%以下－7%未満
やや高い	3%以上5%未満	やや低い	－3%以下－5%未満
ほぼ同様（上位）	1%以上3%未満	ほぼ同様（下位）	－1%以下－3%未満
同様	±1%未満		

● 児童・生徒質問調査の結果

【自分自身について】【人との関わりについて】【学習について】【家庭生活について】

☆ 改善傾向

- (1) 自己有用感・規範意識等に関わる項目のうち「人が困っているとき、進んで助ける」では、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小学生は全国平均を上回り、昨年と比べて増加傾向にあります。
- (2) 幸福感に関わる項目において「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいあるか」では、「よくある・ときどきある」と回答した割合は、中学生は全国平均を若干上回りであり、昨年と比べて増加傾向にあります。
- (3) ICT 機器を活用した学習状況項目のうち「前学年までに受けた授業で、PC・タブレットなど ICT 機器を、どの程度使用しましたか」では、「ほぼ毎日複数の授業・ほぼ毎日 1 回くらいの授業」と回答した割合は、小学生、中学生ともに全国平均を上回り、昨年と比べて増加傾向にあります。

★ 課題傾向

- (1) 自己有用感・規範意識等に関わる項目のうち「学校に行くのが楽しいと思う」では、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小中学生ともに全国平均を下回り、昨年と比べて小学生は減少傾向にあります。
- (2) 学習への興味・関心等に関わる項目のうち、「算数・数学の勉強が好きだ」「算数・数学の内容がよく分かる」では、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小学生、中学生ともに全国平均を下回り、昨年と比べて小学生が減少傾向にあります。
- (3) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況に関わる項目のうち、「前年度までに受けた授業では、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができたか」、「学習について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができたか」では、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答した割合は、小学生は全国平均を上回りましたが、中学生は全国平均を下回っています。
- (4) 基本的な生活習慣等に関わる項目のうち、「朝食を毎日食べている」では、「している」と回答した割合は、小学生、中学生ともに全国平均を大きく下回っています。

● 学校質問調査の結果

多くの項目で小学校・中学校ともに肯定的な回答であり、全国・全道平均を上回る結果でした。ただ、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況における回答は、児童生徒の回答と隔たりが見られます。教員と児童生徒の捉え方の差を埋めるように、個別最適な学び・協働的な学びへの授業改善が一層必要であるといえます。また、全国学力・学習状況調査結果を積極的に活用して、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善していると回答する学校の割合が多い結果でした。

Ⅲ

成果と課題

● 成果

- (1) 小学校の国語は、正答率が全国平均にわずかに届かなかったものの、「書くこと」領域において全国平均を上回り、授業改善の取組の成果が見られます。一方、中学校の国語は、全国平均との差があるものの昨年度より若干上昇しました。全国と比べ伸びしろ層が多く、定着層が少ない結果でした。
- (2) 小学校の算数は、正答率が全国平均よりやや低いですが、昨年度より若干上昇しました。「数と計算」「変化と関係」「データの活用」の3領域で昨年度を上回りました。記述式問題の無解答率は、全国平均を下回りました。
- (3) 小学校の理科は、正答率が全国平均と同様で、前回実施の令和4年度と比較すると大きく上昇しました。また、問題形式では「短答式」「記述式」の正答率が全国平均を上回りました。

● 課題

- (1) 小学校の国語は「読むこと」領域、中学校は「書くこと」領域に課題があります。それぞれ全国平均を下回り、昨年度よりも下降しています。
- (2) 小中学校とも、算数・数学の正答率が全国平均を下回っています。特に中学校は、相当低いという結果で、昨年度を下回りました。領域別では、小学校は「図形」「測定」、中学校は「関数」「データの活用」領域に課題があります。
- (3) 中学校の理科のIRTスコアは全国より低く、IRTバンドは「2」が多い結果です。

Ⅳ

今後の改善策

● 子どもの主体的な学びを重視した授業改善の推進

- (1) 育成を目指す資質・能力を明確にし、学びに向かう力を高める単元指導の工夫
 - 系統性を意識した単元計画の作成と指導の充実を図る。
 - 授業のねらいを具体化した学習活動を位置付ける。
 - 児童生徒との単元計画の共有や振り返りを重視した授業づくりを推進する。
- (2) ICT機器を有効活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実
 - 1人1台端末やAIドリルなどの活用による個々に応じた学習活動を工夫する。
 - 学習の手立てや学習形態の複線型を取り入れた授業の工夫を図る。
- (3) 対話による価値交換で学びの質を高める学習活動の工夫
 - 授業のねらいに沿った話し合い場面を設定する。
 - 児童生徒にアウトプットさせる場面を意識した学習展開を工夫する。
- (4) 学び合う人間関係づくり・学習集団づくりの推進
 - こどもの権利をベースにした学級・集団づくりを推進する。
- (5) 教職員が小中の教育課程の接続を意識し、授業を学び合う取組の活性化
 - 小中連携地区での授業を参観し合う取組を確実に推進する。

● 学校改善プランの組織的・計画的な推進

- (1) 全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、これまでの取組の成果・課題を明確にした学校改善プランの見直し
- (2) 学校全体で目標と具体的な取組の共有
- (3) 学校改善プランに基づく取組の進行管理
 - 取組の進捗状況を点検・評価し、職員全体で共有する。
 - 具体的な取組について短期・中期で検証・改善を行い、実効性を高める。

● 家庭・地域と一体となった取組の推進

- (1) 保護者や地域住民への調査結果や改善方策等の提示
 - 学校だよりやPTA・CSの会議等で、具体的にわかりやすく説明する。
- (2) 生活・学習習慣の改善に向けた児童生徒が自らの生活・学びを調整する力の育成
 - 家庭学習の充実 → 授業と連動した家庭学習の工夫、A Iドリルの活用など
 - 生活習慣の改善 → 生活リズムチェックシートの活用、スマホ依存改善プログラムの推進など

【用語説明】

IRT	項目反応理論。児童生徒の正答・誤答が、問題の特性によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。異なる問題から構成される試験・調査の結果を同じものさしで比較できる。
IRTスコア	IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。各教科にCBT・IRTを導入する年の全国平均500を基準値とし、経年比較が可能な形で算出。
IRTバンド	IRTスコアを1～5の5段階に区切ったもので、平均バンドは3で、5が最も高いバンドとなる。各教科にCBT・IRTを導入する年の全国平均3を基準値とし、経年比較が可能な形で算出。
パーセンタイル	データ全体を小さい順に並べたときに、ある値が下から数えて何%の位置に相当するかを表す数値。小さい値から数えて、総数の1/4 番目に当たる値が第一四分位（25 パーセンタイル）、真ん中に当たる値が第二四分位（中央値、50 パーセンタイル）、3/4 番目に当たる値が第三四分位（75 パーセンタイル）となる。